

## 「海洋中国」と日本を特集するにあたって

金丸 裕一

今回の特集号もまた、本誌第13巻第4号、及び14巻第2号につづく、「環『東中国海』経済文化交流」の研究プロジェクトによる成果が中心となって構成されている。立命館大学国際言語文化研究所の紀要である本誌において、このような連載的に成果が報告される事例は珍しいと思うが、はじめに少々その経緯を説明しておこう。

編集の過程において、薄々は感じていたことであるが、前2号はいずれも力作揃いであった。多少は身内鼎新なのかも考えていたけれど、実際に発行してみると、予想をはるかに上回る反響があった。たとえば本学大学院生執筆の論文に対して他研究機関から事務室宛に照会がなされ、あるいは小生が専攻する歴史学関係の場合、『史学雑誌』における2002年度の歴史学界「回顧と展望」特集号において、収録論文の大半が好意的に論評されるなど、一私学の研究所紀要としては、出色の出来映えであったと言えるのではないだろうか。文学分野においても、特集号収録論文の評価は高いと聞き及んでいる。

こうした経緯の中、さまざまな都合により、これまでの特集号における締切などに間に合わなかった成果、あるいは研究プロジェクト推進期間に開催された会合において提示された参加者の研究などが積み残されている状況は、たいへん残念に思えてきたのであった。よってここに、それらを再度編集して、3回目の特集を掲載する次第である。

「海洋中国」という枠組みについても、若干は説明しておく必要があるだろう。個人的回想で恐縮であるが、小生が研究を志した1980年代において、中国史はもとよりアジア史研究の中心は、「大陸アジア」に所在していたと思われる。折しもNHKにおけるドキュメンタリーが火付け役となり、松田寿男による「中洋史」概念、あるいは長澤和俊によるシルクロード史研究などが、時代の牽引役となって

いたのであった。しかしその後、地道ながらもこつこつと続けられていた海関史・朝貢関係史・華僑史研究などが、実証水準も理論水準も飛躍的に向上した東南アジア史研究やアジア地域間関係史などと有機的に結合し、「大陸中国」乃至「大陸アジア」のみでの世界史認識は不可能であるという見解が、大方から認知されるに到ったといえるのではないだろうか。そして、賛否は分かれるものの、角山榮や川勝平太による、わが国の政策提言をも意識した大胆な世界史構想が提起され、歴史学にも「ロマン」が回復しつつある。今回の特集号に収録された論文も、かかる歴史的背景の産物に他ならないと位置づけられるであろう。

巻頭には、三澤真美恵論文を配置した。この論文は、植民地期台湾における映画普及および映画受容の特徴を、統治者側および被統治者側双方の資料にもとづいて実証的に明らかにした。特に、植民地における映画受容の特異性を、統計データを用いて説明した研究は、管見のかぎりでは他に見当たらない。既に日本や台湾において発表されている三澤の著書・論文、あるいは「粉雪まみれ」のペンネームで書かれた数多くの映画評論などと併せて熟読すれば、一見すると趣味の領域に留まる危険性すら感じさせるテーマが、調理法次第では味わい深い料理へと昇華することが知られるのである。

続く沈祖煒論文は、中国最大の国際都市であり、現在ふたたび往時の繁栄を急激な勢いで回復しつつある街・上海をめぐる社会経済史・経営史である。作者が本研究所で講演した直後、ほぼ同一の内容が出版されたため、採録にあたっては、沈祖煒編『近代中国企業：制度と発展』（上海社会科学院出版社、1999年）を底本とした。海外との各種交流の中でこそ、この個性的都市が成長したあらましが、余すところなく記述されており、いまなお敵中平編『中

国棉紡織史稿』(科学出版社, 1955年)の和文訳などをもって近代中国経済史研究の典型例としているような、一部少数の日本史研究者には、ぜひとも参照してほしい作品といえるだろう。

第三の許金生論文は、やはりこれまで未開拓の領域であった海南島について、特に日本占領時期の経済「開発」問題を中心に分析した研究である。利用史料は二次史料を中心としているものの、埋もれていた感がある素材を発掘して丁寧に読み解き、「第二の台湾」化が挫折した本質的な原因、あるいは日中戦争自体がもっていた限界性について、数多くの具体的事例が明らかにされている。中国側史料を加味すれば、説得力は倍増するだろう。

最後に収録した曹林娣論文は、主題も時代も前記各論文とは、相当の隔たりがある。しかし、「庭園」という私たちが見逃してしまいがちな人為的空間の背後にある哲学・文学が解読されているばかりでなく、素人目では「類似」面のみが目立ってしまう中国と日本の庭園に込められた「理念」なり「情念」

が、実は相当に異なっていたという、日中間の交流を経てなお「相違」が歴然と存在した前近代史のあり方を示唆している。

以上の論文を一読されれば、賢明なる読者は台湾・上海・海南島・江南という地域や主題、あるいは現代中国の形成過程そのものの中に、「海洋」を媒介とした様々な要素が織り込まれている歴史に気づかれるであろう。また同時に、実証研究にはどれ程までの煩雑な手続きと労力とが塗り込まれているかについても、読者諸氏は知ることができるであろう。昨今の巷間における風潮として、多様性こそが本質である中国やアジア研究に対して、語感こそ快適であるが「アジア太平洋学」などという、きわめて乱暴な総括がなされ、研究らしきものが乱造される傾向がある。一つひとつの地域・主題について、「陸」にへばりつき「海」を泳ぎ切る努力をしなければ、決して新しい学問体系を形成することはできない。その意味において本特集は、安直で軽薄な通俗的枠組みを止揚せんとする宣言なのである。